東南アジア・南アジア分科会

カンボジア・アンコール遺跡群における国際協調の枠組み形成に関する日本の貢献

アンコール遺跡群は世界的にユニークで傑出した遺産の一つとして1992年にユネスコ世界遺産に登録されました。その後、日本を含む各国による遺跡の保護と周辺地域の持続的発展のための本格的な支援協力が開始されました。日本政府はフランス政府やユネスコと協力し、1993年より国際的な協力の枠組み形成のためのアンコール遺跡国際調整会議（ICC）の実施に係る支援を継続してきました。この会議を通じ、多数の国と組織による保存・修復や地域開発の取組みにおける課題や成果が共有されるとともに、遺産と地域の持続的な保護・発展のあり方について議論が重ねられてきました。アンコール遺跡群は2004年に危機遺産リストから除外され、そこでの取り組みは、世界遺産の重要な目的である国際協調による遺産保護の成功例として広く他地域でも参照されることとなりました。2012年には「アンコール憲章」が策定され、遺産の価値を最大限に保護するための技術や考え方が共有されたことも重要な成果の一つです。2017年に世界遺産登録されたサンボー・プレイ・クック遺跡群での協力とあわせて、日本による取り組みを紹介します。

アンコール及びサンボー・プレイ・クック遺跡開発国際調整委員会（ICC）

バイヨン寺院における活動
（日本国政府アンコール遺跡救済チーム）

バイヨン寺院は12世紀末に造営されたアンコール王朝最後の段台ピラミッド型の大規模寺院です。多数の尊顔塔と浅浮彫が彫刻された長大な二重の回廊によって複雑かつ高密度な伽藍が形成されています。ユネスコ文化遺産保存日本信託基金を通じて実施されている日本国政府アンコール遺跡救済チームは、このユニークな寺院の建造理念と技術の解明を多様な観点から分析し、その特質を最大限に保存するための技術の開発に取り組んできました。これまでに、寺院の中でも最も緊急を有する南・北経蔵の修復工事を完了し、現在は外回廊の修復工事と並行して、構造的な脆弱性が懸念される中央塔の安定化対策、石材劣化が懸念される浮彫の保存技術の開発に取り組んでいます。バイヨンの他に、再修復工事の考え方と技術的指針の実証的検討を目的としたアンコール・ワット北経蔵、ラテライト造遺構の解体再構築の技術開発を目的としたプラサート・スープラでの修復工事を実施し、また保存修復のための総合的な指針とすべく「バイヨンマスタープラン」を策定し、アンコール遺跡における汎用的な修復技術の提案に寄与してきました。

アンコール・ワット西参道における活動
（上智大学アジア人材養成研究センター）

「カンボジア王国のシンボル」アンコール・ワットは、12世紀前半にヒンドゥー教の宗教建築として造営され、その後16世紀半以降は上座部仏教寺院に変容し今日に受け継がれています。上智大学と王立芸術大学は1991年3月から文化財保存関連分野集中講義の実施及び現場実習に取り組んできました。こうして育成されたカンボジア人若手保存官たちが、1996年から本格始動したアンコール・ワット西参道修復工事第1工区（約100m、2007年完了）の主役として現場をけん引していきました。今では彼らが、母校の学生研修指導や市民への普及教育活動を担当するという循環が生まれています。2023年11月4日には第２,３工区完成記念式典を執り行うに至りました。カンボジアの顔であり且つ人の往来が最も多いとされるアンコール・ワット西参道修復工事の成功は、文化遺産保護と人材育成を共に尊重した日本とカンボジアの国際文化協力の確固たる姿勢を世界へ示しています。

バイヨン寺院南経蔵における修復工事

西参道修復工事の様子（2020年3月）

修復方法の検討にあたる国際的な専門家とカンボジア人専門家による現場協議

西参道修復工事完了後（2023年11月）

タネイ寺院における活動（東京文化財研究所）

バイヨンと同じ頃に建設されたタネイ寺院は、アンコール遺跡群の中心域にありながら例外的に遺跡発見当時の様相を色濃く留めており、このことが大きな魅力となっていますが、保存や安全上の課題も抱えています。東京文化財研究所がアプサラ機構と共同で取り組んでいる本寺院の保存整備事業では、現状景観の維持を基本としながら、文化遺産としての理解の促進や構造安定化などに向けた作業を進めています。その事業の柱の一つとして、密林に埋もれていた正面参道の再生を目指しており、2022年までに外周壁東門の解体修復工事を完了し、目下は参道入口テラスの考古発掘調査などを継続しています。

東門解体修復工事の様子

ドローンによる中心伽藍危険箇所調査

参道入口テラスの発掘調査

西トップ寺院における活動（奈良文化財研究所）

王都アンコール・トム内に位置する西トップ寺院は、13〜14世紀頃に複数の増改築を経て現在の姿に至ったと考えられています。奈良文化財研究所は2002年から西トップ遺跡において、現地文化財保護機関である国立アプサラ機構（アンコール・シェムリアップ地域保存整備機構）と共同で調査研究・人材育成事業をおこなってきました。特に2011年からは、各祠堂の解体を伴う本格的な調査修復に取りかかり、同時並行で行われた発掘調査による地下式レンガ造遺構の検出などを通じて、同遺跡の形成過程を明らかにしてきました。現在、中央祠堂の修復が完成間近となっています。

中央祠堂ラテライド基壇検出状況（北東から）

北祠堂地下レンガ造遺構（南から）

中央祠堂再構築工事の様子（南から）

サンボー・プレイ・クック遺跡群における活動
（早稲田大学、筑波大学等）

カンボジアでは1992年にアンコール遺跡群が世界遺産に登録された後、プレア・ヴィヘア寺院（2008年）、サンボー・プレイ・クック遺跡群（2017年）、コー・ケー遺跡群（2023年）が順次世界遺産に登録されています。世界遺産登録は各遺跡のより良い保存体制を整備する上で重要な契機となっており、各遺跡群には保存管理機構が設立されてきました。

アンコール時代より遡る７世紀前半に王都として築造されたサンボー・プレイ・クック遺跡群には多数の煉瓦造寺院をはじめとして水路や溜池等の痕跡が遺されています。この遺跡群の全体像を明らかにするための研究やメンテナンスと修復工事、そして遺産管理機構の専門家や技能員の育成にかかる事業に早稲田大学や筑波大学等の専門家が取り組んでいます（住友財団、文化財保護芸術研究支援財団、文化遺産国際協力拠点交流事業（文化庁）等の支援事業）。近年では世界遺産登録範囲を本来的な考古学サイト全域に拡張し、遺跡群の全域を保護地区とするために必要とされる研究にも力を注いでいます。世界遺産の登録が進展することで、国際協力の枠組みはアンコール遺跡群からより広域の対象へと今後拡がっていくことが期待されます。

修復技能員の育成プログラムのメンバー
（修復対象であるプラサート・サンボー寺院主祠堂の前にて）

煉瓦造祠堂内の神像が安置されていた石造台座の修復工事
（アンコールで育成されたカンボジア人専門家からの国内での技術移転の現場）

煉瓦造遺構の修復工事現場（オンジョブ形式でのトレーニング）

若手専門家の人材育成プログラムの様子